

# 江田島と硫黄島のこと

古屋 信明

## 1 はじめに

本州四国連絡橋公団から防衛大学校に移ったのは2000年4月だったから、それから丸3年が過ぎたことになる。その3年間に、21世紀の世界や日本の安全保障に大きく影響する事件がいくつか起きた。

まず2001年9月、これまで本土を攻撃されることがなかったアメリカの経済・文化の中心地であるニューヨークの、その象徴でもあった世界貿易センタービルに、あろうことか、ハイジャックされた民間航空機が百数十人の無辜の乗客を載せたまま突っ込んで（首都ワシントンの国防総省にも）構造・橋梁工学を専攻する私にも信じがたいほどの脆さでビルは崩れ落ち、3000人を越す市民が死んだ。このテロ事件は、日本軍の真珠湾攻撃や神風特別攻撃隊と比較されることもあったが、これらは軍隊同士による戦闘行為であったから、NYの出来事と本質において全く異なる。この事件からアメリカがきわめて強い危機感を持ったことは、容易に想像できる。

アメリカは、良くも悪くも長い時間スパンに立った戦略的な発想をする国であり、戦略に沿った国益追求を可能ならしめるための軍事力の整備と、軍事技術の開発に熱中する国である。その自信に裏打されて（当然、復讐心もあったであろう）ウサマ・ビンラーディンやアル・カーイダを壊滅させるためにアフガニスタンに進攻し、また、あのハイジャック犯たちが大量破壊兵器を使った攻撃をしていれば、とてもあんな犠牲では済まなかったという思いから、兵器を隠し持つと疑われ、供給源になる恐れもあったフセイン政権を倒すために、2003年3～4月にかけてイラク戦争を戦った。

一方、日本では2002年9月に小泉首相が訪朝して、それまで国民全体の悲劇と認識することのなかった北朝鮮による拉致問題が強く印象づけられ、さらにその後、この隣国の本質や核武装の意図がはっきり見えてくると、第2次大戦後のほぼ60年間、世界のあちこちで戦争や紛争が絶えることのなかった中で、日本がひとり享受し続けてきた平和はこの先も続くのだろうか、という不安が黒雲のようににわか

に広がってきた。

このように、幕を開けたばかりの21世紀の意外に荒々しい姿が見えてくると、いろいろな想念が湧いてくる。まず一つの独立国として、少なからぬ税金を投入して整備してきている自衛隊が、日本の安全と独立を保障するために、国際標準で行動できる名実とも軍隊でなくて困らないのか。特に日本のように、地政学的にデリケートな地域に属しているにもかかわらず、国土の隅々まで人々が住みついて十分な社会基盤施設に支えられた近代生活を営んでいるという、他国からの攻撃には脆弱な国にあって、国を導く立場にあるべき政治家やマスコミの一部が平和ボケ（国内で、「護憲！平和を！」と叫んでいれば全世界に平和がもたらされるという錯覚）としか思えぬような議論をしていて、国民が困った事態に追い込まれることにならないのか。さらに、現在の地球上が世界政府を樹立できるというような理想（？。私にはわからないのだが）状況からほど遠く、日本人だけが世界政府に代わるものとして誤解していた

国連だって、国と国の露骨な利害対立と妥協の場でしかなかったのだから（2003年イラク戦争開戦前の動き）、個人が最終的に拠って立つにはここしかない母国を、プラスにもマイナスにももう少し素直に見つめ直すべきではないのか……。

まえがきが長くなったが、防大勤務3年目にある2つの島を訪れて感じたことを記すこの雑文は、そのような世界情勢の動きなり、個人的思いの上にある。

## 2 江田島のこと

江田島は広島湾の入り口、広島市宇品港から高速船で約20分の距離の瀬戸内海に浮かぶ。この島には、1888年（明治21年）以降、旧海軍の士官を養成する海軍兵学校が置かれていた（それ以前には東京の築地にあった）。

旧海軍は、19世紀後半の欧米諸国やロシアによるアジア植民地化の高まる恐怖の足音に対する新生日本の備えであった。例えば、本質的には朝鮮半島の権益をめぐるものであったかもしれないが日露戦争の、1905年5月27日の対馬海峡で東郷平八郎大将率いる日本の連合艦隊がロシアのバルチック艦隊にもし敗れていたとしたら、今ごろ我々は、北方四島返還運動ではなく北海道返還運動をしていたのではないだろうか。

また旧海軍は、明治開国以降、遅れていた（というよりほとんど無かった）近代技術や工業を西欧先進諸国のレベルに近づけるための、牽引車でもあった。なぜなら、軍艦を造り、動かすためにはそういったものが必要だからである。さらに敗戦後の復興の中で、海軍に蓄積されていた人や技術が大きな役割を果たしたことも、よく知られている。例えば、私たちが子供のころ日本の主力輸出産業であった造船は建艦技術の継承そのものであったし、また世界ではじめての時速200キロ鉄道（東海道新幹線）を実現するための課題の一つとして、台車の蛇行動という不安定振動を抑制する必要があったが、それに携わったのも零式艦上戦闘機の開発・設計に従事していた技術者である。

さて、江田島には戦後、海上自衛隊の幹部候補生学校（幹候校と略称される）および航海・砲術・水雷などの海上軍事技術を教育する第一術科学校が設置され、明治以降の歴史と伝統を受け継ぎ、日本海軍（敢えてこう書く）の最も重要な教育の場として機能し続けている。現在も一部の校舎には明治時代に造られたもの（一番古くは1893年）がそのまま使用されていて、背後の古鷹山に抱かれた白砂青松の校内には、長い歳月を経てはじめて醸しだされる風格と、良い意味でのnavyらしい清潔感があった。ここに比べれば、建物に限った話ではないが防大は安普請だなと、残念ながら感じてしまった。

幹候校は、防大を海曹長（下士官の最上級）として卒業した学生たちが1年間をさらに職業的に鍛えられる学校である。ここの卒業時に彼らは3尉（士官の最下級）に任官し、海の男（あるいは女）としての実力を磨くために、江田島湾に面した浮き桟橋（これが学校の正面玄関）から練習艦に乗り込み、遠洋航海に出発していくのである。この遠洋航海も昔からの伝統である。ちなみに2003年度は4月24日に出発、10ヶ国・13寄港地を回る138日間・航程約4万キロの航海で、ぴかぴかの新品3尉が180

人（うち女子は9）乗り組んでいる。

かつての旧海軍兵学校時代の卒業生総数は11,160人だという。うち、戦死・殉職者は3,647人とのこと、実に3割強。太平洋戦争が末期に近づいた頃には遠洋航海などあるはずもなく、修業期間を短縮して卒業、すぐに最前線に立ち、そして半数以上が還らなかった。

私が江田島を訪れたのは2003年3月、春霞の頃である。防大研究科（大学院）在学中に私が教えたことのある、ここの卒業生に案内してもらった。例の浮き桟橋のかなたには護衛艦が1隻停泊していて、静けさの中にも力を秘めた影を見せていた。「この湾内一周の水泳もやりましたよ。10海里（18.5km）時速1ノットだから約10時間かかる。分隊ごとにカッターが1艘付いてきて、船端に手をかけて休みながらおにぎりを食べるのです」とは案内してくれたN1尉の説明。これも明治以降ずっと続いているのであろう。

日本のなかの多くの事柄が1945年8月をもって断ち切れ、人間が営む社会であるがゆえに継承されて然るべき価値観や伝統の多くが、捨てられてしまった。捨ててしまったものの中で最大は恐らく、自分の国は自分で守る、という常識ではなかったか。それから身軽になった延長線上に、公（みんな）のために仕事をするを尊ぶという道徳を失い、私の権利のみを主張する風潮が生まれたように思えるし、国際問題への取組みにおいてグローバル・スタンダードからかけ離れてしまった日本の幼稚さもあるようだ。拉致された同胞やその家族の痛みをつい最近まで無視してきた国、一部の政党やマスコミの無責任さも、上述とは裏腹の、国家は国民を守るという常識の喪失、だったような気がする。

そのような世の中の軽佻浮薄とは正反対に見える江田島の桟橋で、瀬戸内海の早春の風を頬に受けながらしばしの間、ここから巣立って行った多くの若者（いま私が日々接しているような）を、彼らがある一面を創り上げてきた日本近代史の光と影を、そして彼らの多くが二度と帰ってこなかったという事実を、あれこれ考えていた。

### 3 硫黄島のこと

硫黄島は、東京の南約1250km、小笠原諸島中ほぼ最南端に位置する火山島である。戦前は1000人ほどが住んでいたというが、戦中の疎開のまま住民は島に帰ることは許されず、したがって現在は基地に勤務する海空自衛官のみがいる。彼らの任務は、島が日本国の領土であることを実効的に示すための存在、というだけでなく、父島・母島などに住んでいる人たちや周辺で操業している漁船などへの緊急時の援助、米空母艦載機の夜間離着陸訓練の支援（神奈川県厚木で行われると騒音公害が凄い）などである。また、日本領最東端である南鳥島（気象観測所がある）への物資輸送も硫黄島を中継地にして行われている。

もっと大きな地理感覚で見ると、硫黄島は東京とマリアナ諸島（サイパン）のちょうど中間に位置する。火山ガスが噴出し、水もほとんどない面積20平方キロほどの割合に平坦なこの小島の、位置的重要性と飛行場建設に適した地形が、1945年2月19日、戦闘機・攻撃機を満載した航空母艦や戦艦群に手

厚く支援された米海兵隊 75,000 人を上陸させた理由である。米軍は、サイパンから日本爆撃に向かう B-29 に護衛戦闘機（航続距離が短い）をつけるために、また損傷を受けた航空機の不時着場所として、さらには、それ以前の太平洋各地における日本軍の熾烈な抵抗ぶりから必至だと判断されていた日本本土上陸作戦の足がかりとして、硫黄島を奪取しようとしたのである。上陸後わずか 5 日間で占領する計画であったというが、実際には、23,000 余名の日本軍守備隊は援軍・補給が皆無であったにもかかわらず、洞窟陣地に拠って 1 ヶ月以上も頑強に抵抗を続け、21,304 人が戦死して（ほかに約 500 人が行方不明）全滅、米軍の損害も死者 5,900 人・負傷者 17,300 人に達するという大激戦になったのである。

硫黄島守備隊の指揮官は栗林忠道中将（陸軍）という人で、彼は、課された任務が孤立無援のこの孤島で決死の抵抗を続けて米軍の占領を 1 日でも遅らせ、もって本土防衛準備のための時間稼ぎをすることにあるとよく理解していたため、それ以前の太平洋諸島で繰り返されていた米軍上陸直後のバンザイ突撃を禁止し、粘り強く継戦するための洞窟陣地を入念に構築させ、また事前に可能な限りの火器弾薬を運び込んでいた。しかしその陣地造りも、火山ガスが噴き出してくる所では防毒マスクをつけていても数十分と続けられず、地熱にも悩まされ、何より乏しい食料と水に体力を低下させながら、米軍機によるほぼ連日の爆撃下に行われたと伝えられている。

私が訪れたのは、目黒の研究所で毎年 7 月に開かれている防衛庁内の研修に参加した折（2002 年）の、一種の修学旅行としてであった。亡くなった人々の魂魄をいまだ濃密に留めているような戦跡の島の、保存されている壕の中、砲爆撃のために山容が変わった摺鉢山の頂き、そこだけ火山ガス起源の水が滴り落ちている崖下（日本兵はここに水を求めて必死の行動をしたという）などを巡ると、いろいろなことを考えさせられる。

- ・ まず、今とは比較にならないようなその頃の国家の重みと、それを引き受けた個人の覚悟……江田島は志願して選ばれたエリート将校の物語であったが、硫黄島は徴兵された一般兵士たちの悲劇であった。硫黄島守備隊は太平洋戦争末期に結成されたため、年配の兵士が多かったという。
- ・ 戦艦大和、特攻隊が民族の悲しい叙事詩として広く知られているの比べ、硫黄島を知っている人は少ない。前 2 者の死が比較的速やかであったのに対し（それが救いだというつもりは全くない）硫黄島では死に至るまでも、飢え渴きと武器弾薬の不足に苦しみつつ戦い続け、空気が汚れきり、むせかえるような異臭のこもった暗い洞窟陣地の中で、次々に追い詰められていくという長い地獄の日々であった。最後まで彼らを戦わせた理由は、一体なにだったのだろうか： 家族を守る気持ち、祖国愛、名誉心……？
- ・ 戦略的に展望がないままでの日本軍の勇戦奮闘は、かえって日本本土上陸作戦の犠牲の大きさをアメリカに予感させ、ソ連への対日参戦要請と、彼らが言い訳にしているとおり原爆投下につながったのではないか。
- ・ あの頃の日本の指導部に責任ある立場としての理性と、時代の流れへの洞察力があったならば、硫黄島戦の大勢が見えてきた段階で終戦を考えるべきであっただろう。そうすれば、戦闘機に護

衛されてより増長した B-29 による本土無差別爆撃、島民をも巻き込んだ沖縄地上戦、広島・長崎への原爆攻撃、ソ連参戦、というような余分な惨劇はなかったであろう・・・などなど。

硫黄島には民航機は行っていないので、乗り心地の悪い航空自衛隊のジェット輸送機で埼玉県入間基地から往復する。亜熱帯特有（島の北緯は概ね 25 度）の爽やかな海風に吹かれながら出発を待ち、そして青く明るい黒潮の海を越えてたったの 2 時間で入間に戻ってきたとき、あの人たちもどんなにか家族のもとに帰りたいかただろう、と胸が痛くなった。

#### 4 あとがき

読み方によっては軍国少年みたいな雑文を書いてしまった。あるいは、防大に行って古屋はやはり洗脳されたのかと思う人もいるかもしれないが、そうではなく、それ以前から心の中にあった思念がもう少し具体的な表現になっただけである。

太平洋戦争を、不勉強なりに次のようにまとめてみる。

まず史実としてアメリカが、日露戦争以降、日本をはっきり戦略的対立国と見なしていたこと（オレンジプランという対日戦争計画を年ごとに改訂し続け、彼らは結局そのとおりに戦った）、1939 年にドイツが始めた第 2 次大戦にイギリスの側に立って参戦することを国民に納得させるために、日本（ドイツの同盟国であった）をも挑発し続けていたこと、がある。一方、日本は中国への侵略を泥沼化させたあげく、それを打開するために、負け戦に終わるより他に結論がない新たな戦争を 1941 年 12 月に始めてしまった。そして日本軍将兵は、明晰な見通しを欠いていた指導部が引き起こしたこの戦争（結果的にはアジア各国の植民地支配からの解放を早めた）を懸命に戦ったが、自国軍隊の被害を局限することに熱心だった米軍とは反対に、捨て駒のように扱われて犠牲を大きくした。桁違いの国力を有するアメリカに対して始められた、戦略的に冒頭から破綻していた戦争は、その進行に伴って個々の戦術局面でも無理を露呈し、さらに一般市民をも巻き添えにして（米軍の責任も大）、より大きな人命損失を強いた・・・。

歴史の if はさまざまに考え得る。しかし現実の一つだから、第 2 次大戦の終結から半世紀以上もたった今、もういいだろうと、次のようにこの雑文を終えたい。

まず、自分たちの国の歴史に素直に向かい合うべきではないか。先入観なく、反省すべき点は反省した上で、幾らかの誇りの念をもって自国の歴史を語れない国民が、国際社会で尊敬されるはずはないのだから。

さらに、次のようなグローバル・スタンダードの常識を受け入れるべきではないか。まだしばらくの間、この地球上で個人の安全で快適な生活を保障してくれる組織は国家であり、国家は国民が形成するものである、という事実を。最後に、独立国として安全保障のために軍隊（日本では自衛隊と呼んでいる）は不可欠だし、またそれは世界と同等の基準（具体的には集団的自衛権の認知と武器使用規則の緩和：武力行使と武器使用は異なる！）で行動できなければならないということ。 （以上）